

社会学教科書におけるデュルケーム社会学の伝えられ方

——ディシプリン再生と社会学教育①——

○聖学院大学 横山 寿世理
日本学術振興会 梅村 麦生

1. 問題の所在

デュルケーム没後 100 年である 2017 年を機に、デュルケームの社会学理論が、どのように受け継がれてきたかを明らかにする。これまでに日本社会学会においても繰り返して社会学教育が問い直されてきた。また日本の社会学者がどんな社会学的著作に最も影響を受けたかについての調査研究も行われてきた。その中で、社会学教育の時代的なトレンドが整理されるとともに、デュルケーム社会学の受容に関しては、ヴェーバー社会学ほどの影響力を示してはいない。ヴェーバー社会学と並べられるデュルケーム「社会学のディシプリン再生」について、あらためて考えたい。

2. デュルケーム社会学の伝えられ方

本報告では、社会学系学部・学科などが設置されている日本国内の大学で公開されている社会学関連科目の 2015 年度シラバスに教科書や参考書として掲載された件数が多い数冊を取り上げて、デュルケームや彼の業績がどのように教育され、受け継がれてきたのかに注目する。具体的には、下記の三冊を予定する。

どの教科書の冒頭でも、デュルケームはジンメルとともに分業に注目した社会学者として紹介される。『社会学』および『新しい社会学のあゆみ』の序章では、デュルケームが捉えた社会が、「近代化する社会の一般的な特徴」をもつことが説明される。『クロニクル社会学』では、序章に続いて第一章で、デュルケーム社会学を確立した人物として紹介している。

また、ヴェーバーとの比較が行われていることも、三冊の教科書に共通している。社会を実在すると考えるデュルケームと、社会的行為の意味を解明して意味の社会学を構想し、方法論的な個人主義の立場をとったヴェーバーとが並べられていることになる。これらの教科書分析において、この社会実在論的な立場にあるデュルケーム社会学は、「正常／病理」「連帯」概念による説明に大きく寄っていることが確認できる。

3. デュルケーム社会学とヴェーバー社会学

たとえば「正常／病理」「連帯」概念に関しては、方法論的個人主義と対になって取り上げられるデュルケーム社会学の主要概念であるが、『社会学』と『クロニクル社会学』において、ヴェーバー社会学の観念である「価値自由」を代替する形で紹介されている。また、各教科書において、ヴェーバー社会学の方が、デュルケーム社会学よりも多くのページを割いている。

そこで、本報告では、入門書である教科書を通じて、デュルケームの社会学理論が日本国内の社会学教育においてどのように受容され、どのような問題を孕んでいるのかを検討する。

文献

新睦人『新しい社会学のあゆみ』有斐閣、2006 年。

那須壽『クロニクル社会学』有斐閣、1997 年。

長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志『社会学』有斐閣、2007 年。

【付記】本研究は、2015～2018 年度科学研究費補助金「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」（基盤研究（B）、課題番号：15H03409、研究代表：中島道男(奈良女子大学)）による成果の一部である。